昭二十八年、有仍氏女黰黑而光甚美可以鑑、名曰玄妻、

〔足薪翁之記〕十筋右衞門幷總右衞門

十筋右衞門は人名にあらず、髮の毛のすくなき事をいふなり、○中略右衞門といふには、何の意もなく、唯十筋ばかりといふに添たる詞なんど、少し嘲る意はあるか、今の世にかゝ左衞門、うんつく太郎右衞門などいふに合せて知るべし、辻君の事を江戸にて夜鷹といひ、上がたにて總家、また總右衞門といふも、總は總家の一家を取り、右衞門は例の嘲りて添たる詞なり、黑川道祐が遠碧軒記延寶年間筆記に、世俗にそうゑもんといふ遊女の事は、總家といふを誤ていふなりと記したるはわろし、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕浮世草子に、そうか、總嫁の字かけり、此說非なり、風流徒然草、五條の河原には、さうかといふ物あり、鹿の武左衞門かたりしは、或夜河原をとをりけるに、ござをかゝへて行ものあり、誰と見むきたれば、そうか男と物いひてゐたるを、あれはそうかといはれて、まどひにけり、未練のさうか、賣そんじけるとあるは、おどけばなしながら、そうかの義は是なるべし、くらき處にイみ居れば、さあるものともおぼめかるれば、名づけしならん、

〔寬天見聞記〕吉田町に夜鷹屋といふ有て、四十あまりの女の、墨にて眉を作り白髮を染て、島田の髷に結び手拭を頰かぶりして、垢付たる木綿布子に、おなじく黃ばみたる貳布して、敷ものをかかへて辻に立て、朧月夜にお出〳〵と呼聲いとあはれなり、予○未詳が幼き頃まで、情を賣こと廿四文にして、數ヶ所出しが、今は其出る所少し、姿も昔とかはり、襟に白粉をぬり、顏は薄化粧して、髮に裁などをかけ、古き半天を著て、古き縮緬の二布したるあり、風俗奢てよりは、價も百文二百にもなりたるとぞ、

〔遊京漫錄下〕難波の夜發